
SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.126 August 2011

新学術領域研究

◆ 第5回国際シンポジウム開かれる ◆

2011年7月7日から8日にかけて、スラブ研究センターで夏期シンポジウム『同盟と境界：地域大国を規定するもの』が開かれました。新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（田畑伸一郎代表）第1班（国際関係班）の主催、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」（岩下明裕代表）、および科研費基盤研究A「北東アジアの冷戦：新しい資料と展望」（ディビッド・ウルフ代表）の共催による今回のシンポジウムには、海外から多くの研究者が集まり、合わせて日米安保60周年と、ソ連崩壊20周年を記念しておこなわれました。今回のシンポジウムで最も重要な意味を持つ試みとしては、アジアの冷戦における同盟と境界の諸問題を明確に位置付けること、現代ヨーロッパの再編に関わる出来事を検証することが挙げられます。

これまで、ヨーロッパとアジアをめぐる二つの超大国が競い合うという構図が、冷戦を捉える



活発な議論で盛り上がるシンポジウム会場の様子



シンポ会場受付にて

上でお定まりの基準となっていました。現実はそのように単純な幾何学的構図で捉えられるものではなく、より複雑に絡み合っていました。まさに合意が結ばれる過程そのもののなかに、将来不和の生じる要因が含まれていることもあったからです。例えば1950年に結ばれた中ソ協定の機密条項は、スターリンやその他の「新しい皇帝たち」に対する毛沢東の態度を硬化させました。さらにその後、日米同盟の取引と、安全保障上の基地をめぐる内密の取り交わし

がなされたことは、「マッカーサー憲法」の関連条項とともに、日本が再軍備にかかる出費を回避することを可能にしましたが、アメリカは後でこのことについて不平を言うようになりました。中ソ関係の場合も、日米関係の場合もともに、安保条約にともなう経済的効果への期待が、長年にわたる非難の応酬を招くことにもなりました。あとから考えてみると、取引の核となる部分に意図的に残された様々な不均衡が、時代を越えてそれと認められる不平等を生みだし、同盟関係の破綻を招いたのは明らかです。

また同じく重要なのは、ほとんどの場合、同盟関係は敵対する勢力に対して目に見えない三角関係を作りながら結ばれるものだったということです。そのため、同盟関係にある国のどちらか一方の変化は、たとえ敵との緊張を和らげる望ましいものであったとしても、「抜け駆けの和合」という裏切りの恐れをもたらすものでした。日本の議員が1950年代に中国を訪問したことに対してアメリカが反応し、1970年代に米中の国交正常化にいたったことは、こうした点から分析されなければなりません。

国境もまた、しばしば厄介な問題となります。冷戦によってあらゆる戦闘に歯止めがかかるとともに、バルチザン戦、秘密作戦、「パブリック・ディプロマシー」など、クラウゼヴィッツの古典的な公式で言うなら別の意味で真の政治をなすところの様々な「小戦争」となると、国境をめぐる小競り合いが起きるようになりました。世界最長の中ソ国境は、友好的に機能する時期もありましたが、より永続的には両国を分かち深い溝となりました。比較的流血沙汰になることの少ない国境をめぐる小競り合いは、しばしば壊れやすい同盟関係の裏に潜んだ三角関係を明るみにします。1959年と1962年に起こった中印衝突は、間もなくして中ソ同盟が崩壊する要因となり、ネルーの抱いていた「非同盟」の道筋を弱めることになりました。1969年にウスリー河流域と新疆ウイグル自治区で起こった中ソ国境紛争は、一つの同盟が終わって別の同盟が始まることについて、中国がアメリカに知らせる明らかな合図でした。

国境と同盟に関する難問の数々においては、ヨシフ・スターリンから鄧小平、リチャード・ニクソンから中曽根康弘にいたるまで、私たちの時代における様々な政治家によって、地域の覇権を築いたり妨害したりするなかで、影響力が行使されてきました。その戦略や計画はしばしば期待とは異なる結果を招いたものの、基本的な輪郭は維持されたままで、同盟国は過去から持ち越された共通の利益や共有される将来の不安によって結びつけられています。国境と同盟に関する問題は、まさに地域大国がそれによって成り立っている要素なのです。これらのことが札幌の白熱した二日間で報告され、議論されました。シンポジウムで報告さ

れた内容は、グローバル COE プログラムの発行する雑誌『Eurasian Border Review』の特集号として刊行される予定です。[ウルフ]

新学術領域研究第5回国際シンポジウム 同盟と境界：地域大国を規定するもの（プログラム）

Alliances and Borders in the Making and Unmaking of Regional Powers

日時：2011年7月7日（木）、8日（金）

場所：北海道大学スラブ研究センター大会議室（403号室）

Thursday, July 7, 2011

9:30-10:00 Welcome: MOCHIZUKI Tetsuo (SRC Director); Introduction: David WOLFF (SRC)

10:00-12:00 Session 1 The Opening Door: New Archival Evidence from Japan

開き始めたドア：日本からの新たなアーカイブ

Chair: ISHII Akira (Emeritus, Tokyo University)

1-1 INOUE Masaya (Kagawa University) "Japan's Pursuit of a Modus Vivendi: Normalization of Sino-Japanese Relations and the Taiwan Issue, 1971-1972"

1-2 YOSHIDA Shingo (JSPS Research Fellow) "Credibility Imperatives vs. Domestic Antimilitarism: Japan's Alliance Policies during the 1970s"

1-3 KUSUNOKI Ayako (Kwansei Gakuin University) "Evolution of the U.S.-Japan Alliance"

Discussants: GABE Masaaki (Ryukyu University) and Vojtech MASTNY (Parallel History Project)

13:30-15:30 Session 2 "Hub and Spokes" Revisited: Korea, Taiwan, ANZUS

「ハブとスポーク」を考える：韓国、台湾、ANZUSの場合

Chair: SASAKI Takuya (Rikkyo University)

2-1 IZUMIKAWA Yasuhiro (Chuo University) "The Emergence and Evolution of the Hub-and-Spokes Alliance System in East Asia"

2-2 MATSUMOTO Haruka (Institute of Developing Economies, JETRO) "Taiwan Strait Crises and Chiang Kai-shek's Strategic Thinking: A Perspective from the Taiwan's Archive"

2-3 Vojtech MASTNY (Parallel History Project) "The ANZUS Experience and Security in Asia Pacific: A Cold War Legacy"

Discussants: NAKAI Yoshifumi (Gakushuin University) and ENDO Ken (Hokkaido University)

15:45-18:00 Session 3 China's Borders 中国の国境

Chair: IWASHITA Akihiro (SRC)

3-1 Sergey RADCHENKO (Nottingham University) "Carving up the Steppes: Borders, Territory and Nationalism in Mongolia, 1943-1949"

3-2 Sören URBANSKY (Freiburg University) "A Very Orderly Friendship: The Sino-Soviet Border under the Alliance Regime, 1950-1960"

3-3 Pierre GROSSER (Institut des Etudes Politiques) "Chinese Borders and Indigenous Parallels: France, Vietnam, and the Korean Model"

3-4 David WOLFF (SRC) "Stalin and Pan-Asianism: The Peoples of Asia Are Looking to You with Hope"

Discussant: Lorenz LÜTHI (McGill University)

18:30-20:30 Reception (Sapporo Aspen Hotel)

Friday, July 8, 2011

10:00-12:00 Session 4 Roundtable on Archives and Archival Projects

ラウンドテーブル「アーカイブとアーカイブ・プロジェクト」

Chair: MINAGAWA Shugo (Emeritus, Hokkaido University)

4-1 Japanese POW Project TOMITA Takeshi (Seikei University)

4-2 Japan GABE Masaaki (Ryukyu University)

4-3 Korea KURATA Hideya (National Defense Academy of Japan)

4-4 Russia Sergey RADCHENKO (Nottingham University)

Discussant: SHIMOTOMAI Nobuo (Hosei University)

13:30-15:30 Session 5 New Recently-declassified Evidence on Sino-Indian Border Conflict

中印国境紛争：公開された証拠

Chair: HAYASHI Tadayuki (Kyoto Womens University)

5-1 Lorenz LÜTHI (McGill University) "Sino-Indian Relations, 1954-1960"

5-2 James HERSHBERG (George Washington University) "Quietly Encouraging Quasi-Alignment: US-Indian Relations, the Sino-Indian Border War of 1962, and the Downfall of Krishna Menon"

5-3 SHEN Zhihua (East China Normal University) "A Historical Investigation of the Sino-Korean Border Issue, 1950-1964"

Discussant: YOSHIDA Osamu (Hiroshima University)

16:00-17:30 Final Discussion Session

Preliminary Conclusions, Emerging Linkages, Unresolved Gaps and Future Agendas

Chair: David WOLFF (SRC)

◆ 第4回全体集会開かれる ◆



全体集会での一コマ

7月9日(土)に新学術領域研究第4回全体集会「最終成果の出版に向けて」が開催されました。プログラムは、下記のとおりでした。今回の全体集会は、新学術領域研究の最終成果を各班1巻ずつの6巻本として出版することが最終的に決まったので、その出版に向けて体制を整え、各巻の位置付けを確認し合うことなどを主な目的としました。おかげ様で、執筆予定者の6割以上の方々に集まっていただけ、有意義な議論ができたように思います。「地域大国」や「ユーラシア」の定義など基本的な概念

の確認や、比較をどのようにおこなうかなどの方法論をめぐる議論もなされました。また、7月9日の午前中や7月10日には、やはり出版を主要議題とする班ごとの打ち合わせがおこなわれました。これらを通じて、最終成果の出版に向けてよいスタートが切れたように思っています。[田畑]

新学術領域研究第4回全体集会「最終成果の出版に向けて」

日時：7月9日（土）14：00～18：00

場所：北海道大学スラブ研究センター大会議室（4階403号室）

①出版の概要について

- ・趣旨説明
- ・執筆者・編者・総括班・事務局・出版社の役割分担と連絡体制
- ・執筆・編集・刊行スケジュール

②各班の出版への取り組みについて

上垣彰「ユーラシア地域大国の持続的経済発展」

唐亮・松里公孝「ユーラシア地域大国の政治比較：統治モデルの模索」

岩下明裕「ユーラシアの国際関係と政治地理」

宇山智彦「帝国の領域性を議論する意味：世界システム論の再考に向けて」

山根聡・長縄宣博「国家の輪郭と越境」

望月哲男「近代文化におけるユーラシアとアジア」

◆ 第6回国際シンポジウム（予告） ◆

2012年1月19日（木）～20日（金）に、新学術領域研究第6回国際シンポジウムが、スラブ研究センター大会議室で開かれる予定です。これは、センター恒例の冬期シンポジウムを兼ねたもので、仮の総合タイトルは *Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order* [近現代帝国の比較：世界秩序変動の中での帝国統治と脱植民地化] です。近代帝国の統治システムの比較、帝国間や帝国と周縁の相互認識、帝国の崩壊と国家再編、国際関係の中での脱植民地化、現在の大国を帝国として見る意味などを、ロシア、中国、インド、日本、イギリス、アメリカ、イランなどの例に沿って議論します。プログラムは出来上がり次第、センターのウェブサイトで発表します。[宇山]

◆ 『比較地域大国論集』第6号の刊行 ◆

新学術領域研究第1班の研究代表者、岩下明裕の編集で、『比較地域大国論集』第6号 *India-Japan Dialogue: Challenge and Potential* [日印の対話：困難と可能性] が刊行されました。これは、本年3月11日にスラブ研究センターでおこなわれた国際シンポジウム「ユーラシアをめぐる日印対話」の報告を中心にまとめたものです。

当号の全内容を、本領域研究のホームページからダウンロードできます。[後藤]

< <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no06/contents.html> >



グローバルCOE

◆ 「境界地域研究ネットワーク JAPAN 与那国・台湾セミナー」 ◆ 開催される



境界地域研究ネットワーク JAPAN・台湾セミナーの様

2011年5月14日（金）に与那国町保健センターにおいて開催されました。これは北大グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が主催し、笹川平和財団の助成、与那国町・日本島嶼学会の共催を受けており、さまざまな境界地域に関わる錚々たる参加者が、日本最西端の島・与那国島に集まりました。（以下・敬称略）

完成したばかりのDVD「知られざる国境の島対馬／国境フォーラム IN 対馬 2010」の上映会のあと、「境界の現場から」と題する基調報告が拠点リーダー岩下明裕（スラブ研）の司会でおこなわれました。報告は財部能成（対馬市長）・外間守吉（与那国町長）・石垣雅敏（根室市副市長）の順でおこなわれ、それぞれの境界地域が抱える課題と、それを克服するための対策が論じられました。

続く第1部では「国境地域法制の再検討」と題し、古川浩司（中京大学准教授）の司会で、境界地域の行政担当者が現場で感じる課題や法制のありかたが論じられました。根室市、小笠原村、五島市、竹富町の行政実務者がそれぞれの地域の現状が、渡邊東（日本離島センター専務理事）・槌谷裕司（内閣府大臣官房審議官）の両氏からは行政側の視点から離島行政の展望が報告されました。

第2部は「超広域経済圏の行方」と題し、引き続き古川准教授の司会により、国境を越えた経済交流の現状と課題が議論されました。加峯隆義（九州経済調査協会調査研究部次長）からは福岡・釜山における広域経済圏について、佐藤秀志（稚内市サハリン課）と今村光壺（稚内商工会議所）からは、稚内・サハリンにおける経済交流について、小嶺長典（与那国町）からは与那国と台湾東部の交流の現状についてそれぞれ報告され、第



「与那国エトピリカ文庫」開設セレモニー

1部に続いて榎谷氏が、沖縄の自由貿易地域制度の現状と課題について、そのあらましを論じました。

質疑応答の席上では、与那国への自衛隊誘致の是非や防空識別圏の変更といった問題も俎上にのり、緊張感の漂う瞬間もありました。続いて開催された懇親会では、与那国町職員さんの手料理の数々がふるまわれ、町民のみなさんの民謡と踊りが雰囲気を大いに盛り上げてくれました。

与那国においては、同時に「与那国エトピリカ文庫」の開設を祝うセレモニーも開催されました。エトピリカ文庫とは、『北方領土問題：4でも0でも2でもなく』（中公新書）により第6回大佛次郎論壇賞（2006年：朝日新聞社）を受賞した岩下が、根室市におこなった寄付をもとに、2007年に北海道立北方四島交流センター「ニ・ホ・ロ」に設置された文庫です。与那国エトピリカ文庫は、根室・札幌・対馬に続く4番目の文庫であり、与那国や沖縄の郷土研究資料なども多数含まれています。

セミナーの参加者は、続いて台湾セミナーに参加するため、与那国から花蓮へとチャーター便で移動しました。このチャーター便は、沖縄本土復帰記念日にあたる5月15日に、与那国・台湾でのセミナー開催を記念して運行されました。台湾の復興航空による同便には、外間与那国町長に加え、中山石垣市長・川満竹富町長が同乗しました。同便が与那国空港を飛び立つ前に式典が執りおこなわれ、チャーター便の運航を祝いました。

花蓮に到着したセミナー参加者は、花蓮空港にて田智宣花蓮市長、花蓮市政府のみなさんの温かな歓迎を受けた後、花蓮でのセミナー会場である美侖大飯店に移して「境界地域研究ネットワーク JAPAN・台湾セミナー」が開催されました。席上では、前日に続き外間・財部・石垣・今村各氏の報告があったほか、浅井利真（与那国町・久部良小学校長）と松田良孝（八重山毎日新聞記者）の両氏によって、教育と報道の視点からの報告がなされました。続く懇親会の席上でも、与那国町に続き、花蓮市政府のみなさんの心からの歓迎を受け、参加者一同はまたまた時間を忘れての歓談となりました。[平山・井濶・藤森]



与那国・花蓮チャーター便運行

研究の最前線

◆ 2011年度科学研究費プロジェクト ◆

2011年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです。[編集部]

基盤研究 (A)

望月 哲男 ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究 (2009-11年度)
 ウルフ ディビッド 北東アジアの冷戦：新しい資料と展望 (2009-12年度)

基盤研究 (B)

- 松里 公孝 ロシアにおける宗教復興:公共機能、ライフヒストリー、空間動態 (2009-11 年度)
宇山 智彦 近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史 (2009-12 年度)
松里 公孝 宗教、国家、マイノリティが織りなす環黒海跨境政治 (海外) (2009-11 年度)
原 暉之 国境の植民地サハリン (樺太) 島の近代史:戦争・国家・地域 (2010-13 年度)

基盤研究 (C)

- 木山 克彦 極東地域における^{まっかつ}鞅鞅に関する考古学的研究 (2008-12 年度)
長縄 宣博 帝国とメッカ巡礼:ロシアのムスリム地域の視点から (1865 ~ 1914) (2010-12 年度)
兎内勇津流 ロシア正教の教義確立とフィラレト (2010-12 年度)

若手研究 (B)

- 越野 剛 ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける歴史小説の比較研究 (2009-11 年度)
後藤 正憲 ロシア・チュヴァシにおけるト占の歴史人類学的研究 (2009-11 年度)
野町 素己 カシュブ語統語論の総合的研究 (2010-12 年度)
井潤 裕 旧ソビエト周縁地域における都市空間の歴史の変遷:極東・ウクライナ・中央アジア (2010-11 年度)
草野佳矢子 帝政ロシアの統治官僚と地方自治:第一次革命前ロシア内務省の組織と活動 (2010-12 年度)
小松 久恵 雑誌に見る「近代」:ヒンディー語女性雑誌におけるインド近代表象 (2010-13 年度)
住家 正芳 社会進化論の影響を軸とした、近代中国と日本におけるナショナリズムと宗教の比較研究 (2011-13 年度)
井上 暁子 ドイツ=ポーランド国境地帯の文学と移民文学の比較研究 (2011-14 年度)
瀧口 順也 「コミュニスト」の創造:コミンテルン期における共産主義者形成過程の国際史的考察 (2011-14 年度)
平山 陽洋 第1次インドシナ戦争期の北ベトナムでの総動員体制の構築と冷戦の影響をめぐる研究 (2011-13 年度)

学振特別研究員奨励費

- 菊田 悠 中央アジア定住地帯の秩序の再編成プロセスにおけるイスラーム聖者と聖性の役割 (2011-13 年度)
安達 大輔 近代的読書メディアとしてのロシア・ロマン主義文学研究:「社交界小説」を中心に (2009-11 年度)
宮崎 悠 公共宗教と国民形成の政治力学:ポーランド・ナショナリズムとカトリック教会 (2010-12 年度)
森下 嘉之 国民国家の形成期における地域社会の変容と住民:20世紀中東欧を事例に (2011-14 年度)

学振外国人特別研究員奨励費

- ベアトリーチェ・ペナティ (研究代表者・宇山智彦) ウズベキスタンにおける土地水利改革:集団化以前の農村社会のソヴィエト化 (2009-11 年度)

◆ 2011 年度公開講座 ◆
スラブ・ユーラシアで躍動する人々
開催される

5月の毎週月曜日と金曜日に、毎年恒例の公開講座が開催されました。今年度は、人間の移動をキーワードに、ロシア史を彩る7つの民族を西から東へと辿り、その終着点に日本人を置くことで、私たちが広大なロシアの多様な顔の一つしか見ていないことを確認していただくことを目指しました。今回は、90名ほどの登録があり、日本人を含む様々な民族を対等

なロシア史の主人公として語るといふ試みに熱心に耳を傾けていました。講義の最後におこなわれた質疑応答では、専門家の間でも論争的なテーマの他、日本人が今後、ロシアとどのように付き合っていくべきかを含めた内容の濃い議論が展開されました。参加していただいた皆様と講師の先生方に深く御礼申し上げます。

今回は、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第5班「国家の輪郭と越境」との共催でおこなわれました。[長縄]



熱心に聞き入る受講者の皆さん

| 日 程 | | 講 義 題 目 | 講 師 |
|-----|----------|----------------------|--|
| 第1回 | 5月9日(月) | ロシア人：歴史における拡張と統合 | 静岡県立大学国際関係学部 教授 西山克典 |
| 第2回 | 5月13日(金) | アルメニア人：文明の潮目で | 東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所 研究員 吉村貴之 |
| 第3回 | 5月16日(月) | ドイツ人：二度の大戦に翻弄された人たち | 愛知県立大学外国語学部 講師 半谷史郎 |
| 第4回 | 5月20日(金) | ユダヤ人：共存と排除の200年 | 立教大学文学部 特任教授 高尾千津子 |
| 第5回 | 5月23日(月) | タタール人：祖国とイスラーム世界の狭間で | 北海道大学スラブ研究センター 准教授 長縄 宣博 |
| 第6回 | 5月27日(金) | 中国人：脅威と共生の間で | 富山大学極東地域研究センター 教授 堀江典生 |
| 第7回 | 5月30日(月) | 日本人：ロシア極東における戦争と水産業 | 新潟国際情報大学情報文化学部 准教授 神長英輔 |

◆ 2012年度特任教員（外国人）決定 ◆

2012年度における外国人特任教授の審査がおこなわれ、32人の応募者の中から、以下の6名の正候補者が、過日の協議委員会で承認されました。[家田]

ベクス-ゴンチャロヴァ、ネリー (Bekus-Gonczarowa, Nelly)

所属・現職：ワルシャワ大学東スラブ学部助教授

研究テーマ：ベラルーシにおける民族言語ナショナリズム対ロシア文明化イデオロギー：ベラルーシ発展の論理を求めて

予定滞在期間：2012年11月1日～2013年3月31日(5ヵ月)

ブリュムバウム、アルカージ (Blyumbaum, Arkady)

所属・現職：ロシア科学アカデミーロシア芸術史研究所上級研究員

研究テーマ：アレクサンドル・ブローク：文学と政治(1905-1921)

予定滞在期間：2012年11月1日～2013年3月31日(5ヵ月)

パン、ドンメイ（庞冬梅）（Pang, Dongmei）

所属・現職：黒龍江大学ロシア研究所准教授
研究テーマ：ロシア極東地域における中国人による犯罪への対処
予定滞在期間：2012年11月1日～2013年3月31日（5ヵ月）

ラウンド、ジョン（Round, John）

所属・現職：バーミンガム大学地理・地球・環境学部上級講師
研究テーマ：先の見えない生活に対応する：現代ロシアにおける日常生活
予定滞在期間：2012年6月1日～2012年10月31日（5ヵ月）

リヤザンツェフ、セルゲイ（Ryazantsev, Sergey）

所属・現職：ロシア科学アカデミー社会政治研究所教授
研究テーマ：民族移住と国境隣接地域におけるディアスポラの形成：ロシアの国家安全保障を考えるうえで
予定滞在期間：2012年6月1日～2012年10月31日（5ヵ月）

ウィークス、セオドア（Weeks, Theodore）

所属・現職：南イリノイ大学歴史学部教授
研究テーマ：Vilna, Wilno, Vilnius：多文化都市の歴史（1795-2000）
予定滞在期間：2012年6月1日～2012年10月31日（5ヵ月）

◆ 2011年度鈴川・中村基金奨励研究員決定 ◆

今年は6名の応募があり、以下の4名の方が採用されました。[野町]

| 採用決定者・所属 | テーマ | 希望滞在期間 | ホスト教員 |
|------------------|--|----------------------|-------|
| 千葉美保子 関西大学大学院 | 近世ロシアにおける外国人居留者と その居住空間について | 2011年 9月1～21日 | 長縄 |
| 机 文明 法政大学大学院 | ソ連の外交史全体の中において対 日外交がいかなる位置づけであっ たかの解明 | 2011年 12月5～25日 | 岩下 |
| 近藤 大介 一橋大学大学院 | ゴーゴリ作品とブルガーリンを中 心とした1830年代のジャーナリ ズムに関する研究 | 2011年 9月1～16日 | 望月 |
| 高橋 知之 東京大学大学院 | プーシキンやレールモントフ、ド ストエフスキーの作品におけるナ ポレオンの表象についての研究 | 2011年 10月20～11月5日 | 望月 |

◆ グチノヴァ氏の滞在 ◆

2011年6月15日から10ヵ月の予定で、ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所のエリザ＝バイル・グチノヴァ（Guchinova, El'za-Bair）さんが、国際交流基金・日本研究フェロウシップによりセンターに滞在しています。グチノヴァさんは2005年度にもセンター外国人研究員として来日し、ジェンダーの視点から見たカルムイク人強制移住について研究されました。その折に日本人抑留問題に関心をもち、今回は日本人抑留者の視覚的記憶をテーマとしておられます。既に抑留経験者とのインタビューや、彼らが描いた絵や漫画の分析をおこない、飢えや排泄などの身近で切実な問題に抑留者がどう対処し、どのように記憶しているかについて研究を進めています。人類学者ならではの視点から抑留研究に貢献することが期待されます。[ウルフ・宇山]

◆ リチャードソン氏の滞在 ◆

昨年4月から自国の奨学金でセンターに滞在していたリチャードソン氏が、日本学術振興会外国人特別研究員として新たに、2011年7月22日から2012年7月20日までの予定でセンターに滞在することになりました。氏の研究テーマは「北方領土の言説を越えて：日本の中央・地方間政治とナショナルアイデンティティ」です。[編集部]

◆ マクスト氏の滞在 ◆

2011年7月13日から8月12日までの予定で、カザフスタンのユーラシア国立大学政治学部博士課程院生のクラライ・マクスト (Maksut, Kuralay) さんが、同大学の研修プログラムによりセンターに滞在しています。彼女の研究テーマは、「EU諸国(特にチェコ、スロヴァキア)と中央アジア諸国の関係」です。中央ユーラシア研究者のみならず、中東欧研究関係者の皆様との交流を望んでいます。[宇山]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任セミナーが以下のように開催されました。[家田]

2011年5月12日：松里公孝 “Faith or Tradition: The Armenian Apostolic Church and Community-building in Armenia and Nagorny Karabakh”
センター外コメンテータ：吉村貴之（東京外国語大学）

今回の論文はこれまで松里氏が精力的に現地調査を継続してきた「非承認国家」に関する研究の成果です。特に「宗教と政治」という切り口でアブハジア、オセチア、トランスニストリアを分析してきた成果の続編でもあります。コメンテータからは、現地面接調査言語がロシア語であることから生じる齟齬、宗教と政治の関係における国外アルメニア人やロシアのアルメニア人からの影響等について質問が出され、他の研究員からはソ連期における宗教実践のあり方、農村における組合改革との係わりなどが疑問点として提出されました。

5月30日：岩下明裕 「グローバル・ユーラシア：新しい地政学の創造」
センター外コメンテータ：林忠行（京都女子大学）

GCOEプロジェクトで新しい国境地政学の創造を目指す岩下氏が「ユーラシア」概念を縦横に使ってロシア、中国だけでなく、アメリカやインド、さらには海国日本までも視野に入れた議論を提示しました。コメンテータは、昨年度までセンターに在籍していた（正確には北大副学長だった）林忠行氏が務め、ユーラシアの定義などをめぐって、新しい地政学の射程が問題とされました。討論全体としても、「ユーラシア」ないし「ユーラシア主義」などの分析概念の操作に関して様々な角度から議論がなされ、新しい学問と新しい分析概念を生むための有意義な示唆が数多く提示されました。

7月29日：宇山智彦 「カザフ知識人にとっての〈東〉と〈西〉：階層的国際秩序の認識と文化的精神性の希求」
センター外コメンテータ：守川知子（北大文学研究科）

今回の論文は東大出版会から刊行が予定されているシリーズものの第一巻に収録される予定の原稿でした。旧ソ連東欧という地理空間を論じる時には、とりわけ総論的に論じる時には、「東と西」という対比は避けがたく、今回は宇山氏もオリエンタリズム論などを独自に深めるなどして、カザフ知識人の視点から、日本も含めたオリジナルな東西論が提示されました。

た。イランを専門とするコメンテータの守川氏からは、やはり東西を常に意識していたイランとの対比も含めて、非アラブの視点からのイスラームとヨーロッパという極めて新鮮な問題が提起されました。比較大国研究と境界研究をてこに、いよいよ本格的にセンターはグローバルなユーラシア研究に乗り出しました。

◆ 前号の訂正 ◆

前号 125 号の「共同研究員」の項の《GCOE 共同研究員》に佐藤圭史氏（任期：2011 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日）が抜けていました。お詫びして追加いたします。[編集部]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 125 号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです（前ページまでに記事のあるものは除く）。[大須賀]

- 4 月 28 日 平賀雄（北大・院）「パーベリ『騎兵隊』における登場人物」（世界文学研究会）
- 5 月 19 日 奥山史亮（日本学術振興会特別研究員）「クリアースの文学作品と宗教学的営為：ルーマニア人亡命者の宗教学者による社会主義政権批判」（世界文学研究会）
- 5 月 25 日 地田徹朗（センター）「ソ連における水利開発とその理論的背景：カザフスタン・イリ川を中心に」（北海道スラブ研究会／GCOE・SRC 研究員セミナー）
- 5 月 26 日 川上淳（札幌大）「近世後期の奥蝦夷地史と日露関係を考える」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 5 月 28 日 菊池俊彦（北大名誉教授）「サハリン古代史の研究：私とサハリンの関わり」；倉田有佳（函館市役所）「ピリチとサハリン島：元流刑囚漁業家にとっての日露戦争」（サハリン樺太史研究会）
- 6 月 2 日 I. コルホネン（フィンランド銀行）“Forecasting Economic Developments in Major Emerging Markets - Some Preliminary Results”（比較地域大国論セミナー）
- 6 月 11 日 仙石学（西南学院大）『『中東欧・旧ソ連諸国の選挙データ』構築まで』（プロジェクト型共同研究成果報告）
- 6 月 14 日 平山陽洋（センター）「ベトナムにおける『戦争文学』というメディア」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 6 月 16 日 土田環（映画専門大学院大）「東への道：1950 年代の西洋映画における『インド』」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 6 月 20 日 B. ジョゼフ（オハイオ州立大、米国）“Phonological Borrowing and Language Borders in the Balkans”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 6 月 21 日 W. ブラウン（コーネル大、米国）“Burgenland Croatian: An Old Language on a Do-it-yourself Border with a New Name”（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 6 月 27 日 谷古宇尚（北大文学研究科）「境界と風景画：色丹グループの活動 1966-1991 年」（第 14 回ポスタースタディーズ・セミナー）
- 6 月 30 日 野町素己（センター）「東欧に架かる虹：境界の詩人オンドラ・ウィソホルスキとその言葉」（世界文学研究会）
- 7 月 9 日 新学術領域研究第 4 班研究会「オスマン帝国史：比較の視点から」秋葉淳（千葉大）「19 世紀オスマン帝国における領土的編制と領土的想像力」；佐々木紳（東京大）「近代オスマン帝国の知識人と帝国意識」
- 7 月 12 日 西内修一（北海道立総合研究機構水産研究本部栽培水産試験場）「オホーツク海における水産資源の持続的利用」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 7 月 13 日 渡邊清美（北大・院）「テオドール・フォンターネの社会批判」（世界文学研究会）
- 7 月 15 日 家永真幸（東京大・院）「境界研究としての中国バンダ外交」GCOE・SRC 特別セミナー
- 7 月 20 日 E. アスタフィエヴァ（SRC）“The Russian Presence in Palestine: Political, Religious, and Cultural Aspects (1847-1917)”（ロシア語）（センター・セミナー）

- 7月21日 GCOE 夏季特別企画「南の国境・八重山島唄の夕べ」
 7月22日 T. ダリエヴァ（筑波大）“Sights and Signs of Postsocialist Urbanism: The Post-Soviet Eurasian City as a Postcolonial City?”（センター・セミナー）
 7月28日 A. マイエヴィチ（アダム・ミツキエヴィチ大、ポーランド）“Saving Moribund and Dead Languages Neglected Issues in Minority Language Research and Policies”（GCOE・SRC 特別セミナー）
 7月30日 山崎典子（東京大・院）「清末民初の中国における『回族』の創出と変容：ムスリム・エリートと国家の関係を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会）

クレイジー コパチンスカヤに首っだけ！

左近幸村（GCOE 共同研究員）

私がパトリチア・コパチンスカヤという（日本ではしばしば「パトリシア」と表記されるが、本人はこの読み方を好まないと言っていた）、モルドヴァ出身の若手ヴァイオリニストの名を知ったのは、月刊誌『レコード芸術』2008年11月号の月評欄を読んだ時である。そこに、彼女がピアニストのファジル・サイと一緒に録音した、ベートーヴェンのクロイツェル・ソナタほかのCDに対する批評が載っていたのだが、その評価はあまり



パトリチア・コパチンスカヤ

芳しいものではなかった。『レコード芸術』は通常、2人の評者が新譜を批評し、それぞれが「推薦」「準推薦」「無印」という3段階の評価をつける。1人の評者は準推薦で「《クロイツェル》に新しい光を当てた演奏であることは確かだが、聴き手を落ち着かない気分させることも否定できない」と述べ、もう1人は無印で「第1楽章の第1主題、コパチンスカヤのぎすぎすと弦を擦る慌ただしい演奏は、（中略）ほとんど耳を塞ぎたくなるくらい」とかなり手厳しかった。だが私は、その酷評ぶりに「音楽評論家をこんなに怒らせるなんて、もしかしたらとても面白い演奏をする人かもしれない」と、逆に彼女に対して興味を抱いたのである。今にして思えば、こうした出会い方も、彼女にはふさわしかったかもしれない。

そのうちネット上で彼女を評価する声も現れはじめ、私はますます彼女の演奏を聞いてみたくなった。彼女について詳しく知りたい方は、伊東信宏『中東欧音楽の回路：ロマ・クレズマー・20世紀の前衛』（岩波書店、2009年）所収のエッセイをご覧ください。ひとまず彼女の基本情報としてここで押さえておきたいことは、父は凄腕のツィンパロン奏者、母も民族音楽のヴァイオリニスト、ソ連崩壊直前にモルドヴァを離れ、現在はスイスのベルン在住で親よりも年上の男性と結婚して娘もいるということである。

私が彼女の演奏に実際に接したのは、2010年1月末、ザルツブルグにおいてである。モーツァルト週間の一環で行われた演奏会に彼女が出演した時だが、彼女が弾いたのはモーツァルトではなく、ジョルジュ・クルタークというハンガリー出身の現役の作曲家が書いた、《カプカ断章》というヴァイオリンとソプラノのための1時間強の作品である。半ば朗読のよう

な形でソプラノがカフカのテキストの断章を歌い、それに特殊奏法を駆使したヴァイオリンが絡むユニークな曲だ。10年前に《墓碑 (Stele)》という管弦楽のための作品に出合って以来、クルタークは私にとって気になる存在だった。それに、モーツァルトの音楽祭で現代音楽をやるといふにも惹かれた。おまけに今話題のコパチンスカヤが出演する。これに行かない手はない。

さて演奏会の感想であるが、それについては、のちに彼女に直接送ったメールを引用するのが適当だろう。すなわち「あなた方のヴァイオリンと体を通じて、私は作曲者が作曲時に感じていたインスピレーションを感じることができました。私は実験的なジャズのようにあなた方の演奏を楽しんだのです。」

前述のように特殊奏法を駆使した、つまり難曲中難曲を一分の隙もなく弾ききるコパチンスカヤの姿を見て、私は驚嘆した。おそらくこの人は「本物」だ。機会があればまた聞いてみたい。そんなことを考えながら私は会場を後にし、駅に向かって歩いた。

人生最大の椿事—奇跡というべきか—が起こったのは、この時である。

ふと前のほうを見ると、さっきまで舞台の上にはいたコパチンスカヤが一人で歩いていたのである。私は、せっかくだしサインでも貰おうと、完全にミーハーなノリで彼女に声をかけた。「コパチンスカヤですか。さっきまであなたの演奏を聞いていましたよ」

すると、彼女は「ありがとう」と言って笑顔で握手してくれたあと、私の全身を眺め、「あなた日本人？」と聞いてきたのである。

「ええ、そうですが、でも今ロシア史の研究のためにペテルブルグに住んでいます」

「なんでロシア史を研究しているの？」

「話せば長くなるのですが…」

と、なぜかこんな感じで会話が始まってしまった。そのうち彼女の迎えらしき人が来たので、別れる前にサインでも貰おうとプログラムとペンを取りだして彼女に渡したところ、彼女がそこに書いたのはメールアドレスだった。「帰ったらここにメールを頂戴！」

私はすっかりいい気分になった。会話できたうえにメールアドレスまでもらった。きっとファンレター用に公開されているアドレスだろうが、それで十分だった。返事をくれるかどうかはともかく、彼女は読むだろうから。

ペテルブルグに帰ると早速、クルタークを好きになったいきさつや、先に引用した演奏会の感想をしたためたメールを、彼女に送った。ところが送信してから3時間後 (!)、私は驚愕した。Patricia Kopatchinskaja (Private) というアカウントから返信が来たのである。しかもその書きだしたるや、以下の通り。

「It was a very stressful day in Salzburg, I was completely done and - can You imagine - I went to the cinema (avatar :-)) 【ザルツブルグの日はとってもストレスフルで、私はすべてを出しきって—想像できる?—映画 (アバター) に行ったのよ!」

私は狐につままれたように、パソコンの前でポカンとしてしまった。彼女はいったい何者…? それでも彼女から「あなたってとっても面白いわ!」「これからもコンタクトを取りましょう!」と言われて、自分の何がそんなに面白いのかよく分からないままに、私は有頂天になってしまった。

次に彼女の演奏を聞いたのは、3月にヘルシンキで行われたフィンランド放送交響楽団の定期演奏会においてである。指揮はイスラエル出身のイラン・ヴォルコフ。曲はシェーンベルクのヴァイオリン協奏曲。彼女自身「とてつもなく難しい」と認めていたように (ただし「これは歴史的に重要な作品だ」とも言っていた)、これまた難曲中の難曲であり、下手をすると30分間のノイズにしかならないのだが、コパチンスカヤは余裕を持ってそれを「音楽」にしていった。あるいは、その難しさをスリリングな面白さに変えてみせたと言っていいか

もしれない。そうだ、シェーンベルクなんて怖くない、シェーンベルクは面白いのだ！ 私は聞きながら何度もけぞり、演奏終了後、思わずフーと息を吐いたのである。付言しておく、ヴォルコフは美しい指揮でオケを統率し、コパチンスカヤを見事に支えていた。

その後、休憩時間になって、私は彼女の楽屋を訪ねた。まるで疲れた様子を見せずにピンピンしていた彼女は、私に「コンサート後のディナーに来る？」と聞いてきた。私の答えはもちろんイエス。

コパチンスカヤにディナーに誘われて、頬がすっかり緩んでしまった私だったが、すぐに自分の考えの甘さを痛感することになった。

そのディナーの参加者というのが、コパチンスカヤ、コパチンスカヤの父のヴィクトル・コパチンスキー、指揮者のヴォルコフ、そして私の4人だったのである。一流の音楽家に交じって、明らかに場違いな人間が一人…。さっきの笑みはどこへやら、私は面接試験を受ける学生のように、完全に凍りついてしまった。なんで私がここにいるんだ!?

私に度胸と語学力があれば、横に座ったコパチンスキーからいろいろと面白い話を聞き出せただろう。この人はソ連を代表するツィンバロン奏者だったのだ。しかし彼の風格と威厳に圧倒されてしまった私は、半ば崩壊したロシア語でなんとか会話するのがやっとという有様だった。これがスラブ研究センターの入試だったら、私は間違いなく落とされていたに違いない。

ヴォルコフも幸い気さくな人で、もしやと思って聞いてみると、父はモスクワ出身ということだった。よく考えると、4人ともロシア人ではないが、みんなロシアに縁があるという共通点があったのだ。その他、いろいろな話をしたが、この日の会話で私が忘れられないのは、レストランに向かう車中でコパチンスカヤが語った次の言葉である。

「My husband is very crazy, but he has never been boring me.【私の夫はとっってもクレイジーよ。でも彼には退屈させられたことがないの】」

私が聞いた究極の愛の言葉である。私もこんなことを言ってみたいし言われてみたい。前述の伊東氏のエッセイに、コパチンスカヤとその夫の関係について「不思議で繊細で破天荒な愛情」という表現があるが、彼女自身の言葉を聞いて、ああこのことかと思った。そして「不思議で繊細で破天荒」という言葉は、彼女の性格と奏でる音楽もまた同時に表しているように思える。

彼女が昨年秋にスイスのテレビ局に出演した時の映像をインターネットで見たことがあるが、番組の最後で彼女は、司会者の男性のしゃべりにヴァイオリンの即興演奏を絡ませるといふ離れ業をやってみせた。それは一見、ヴァイオリンをただかき鳴らしているだけのようであり、高度に洗練されたテクニックに裏打ちされていることは明らかで、司会者のトークと見事に一体化して、ただのおしゃべりを一気に「音楽」に変えてしまったのである。この場面を見たとき、自分の中にあった「音楽」や「演奏」の常識が思いっきり揺さぶられるのを感じた。



イラン・ヴォルコフとコパチンスカヤ

実は同様の揺さぶりを、ロシアの実験的なジャズのライブに行くと感じることがある。あるいはシュニトケの交響曲第1番（ベートーヴェンの引用があったかと思うと、オーケストラの中で突然ジャズ・バンドが演奏を始めるハチャメチャな怪作）に生で接したときにも同様のショックを受けたが、彼女の場合、音楽的には素人の司会者を唐突に巻きこんでしまったので、その分、呆気にとられてしまった。

ダンテはベアトリーチェに導かれて天国を旅したが、私はコパチンスカヤに導かれて音楽の世界を旅する。もちろん私には、『神曲』のような文学作品を書く能力はなく、代わりにこんなエッセイを書いてお茶を濁すのが関の山だけだ。こうしてコパチンスカヤのおかげで、恐れ多いほど希少な経験をさせてもらったが（もらっている、と現在進行形にしたほうが正確かもしれない）、それにしても、なぜあの時ザルツブルグでメールアドレスを教えてくれたのか、腑に落ちなかった。そこである時、彼女に直接この疑問をぶつけてみたところ、次のような答えが返ってきた。

「ペテルブルグに住んでいる日本人が、クルタークを聞きにザルツブルグまで来るなんて面白いと思ったから。私は面白いと思ったら誰とでも付き合う」

研究者の世界には奇人変人が多い（誉め言葉です。念のため）、私に負けず劣らず面白いクレイジーな人は私の周囲にゴロゴロいる。世界中を探せば、それこそゴマンといはずだ。そんな中で私が彼女と親しくなれたのは、まったくもって何という僥倖だろうか。

ザルツブルグでコパチンスカヤに出会う一月前に買った、キース・ジャレットのテストメント（ECM）というCDのライナーノーツの最後に、次のような言葉が引用してあった。キース・ジャレットと親交のある作家の言葉らしいのだが、その後私は折に触れてこの言葉を反芻することになり、コパチンスカヤへの最初のメールにも引用した。これをもって、エッセイの締めくくりとしたい。

「How fragile and serendipitous things are indeed, unbearably so. 【物事は、まったくもって何ともく僥倖なのだろう、耐えがたいまでに】」

セルビア科学芸術アカデミー会員ミルカ・イヴィッチ (1923-2011)のご逝去を悼む

野町素己（センター）

2011年3月8日朝、Eメールを見ようと何気なく携帯電話を開くと、セルビア語研究所所長スレト・タナシッチ先生からのメッセージが入っていた。4月上旬のBASEES年次集会のあとベオグラードに行くと言っていたので、その約束についてだと思いメッセージを開くと、一気に眠気が吹き飛び、ショックで息が止まるのを感じた。

尊敬する野町素己さん

今あなたに大変悲しく、しかし自然の摂理に適った連絡があります。今朝早くに学士院会員ミルカ・イヴィッチが他界しました。

尊敬をこめて

スレト・タナシッチ

この数週間前に、学士院のプレドラグ・ピペル先生からイヴィッチ先生は体調が優れず入院している旨は聞いていた。だいぶ深刻な状態であったことは、ピペル教授からのメールで伝わってきたが、4月にお見舞いに行ってお話しできるものと漠然と思っていた。しかし、

これはもはや決して叶うことはないのだと思うと、まさに痛恨の極みである。ここでは故人への追悼として、先生の思い出を少し書いてみたい。かなり個人的なこともあるが、これを書き残すことで、悲しさが幾分薄れるような気もするので、このように紙面を使うことをお許しいただきたい。

* * *

ミルカ・イヴィッチ先生は、ご主人のパヴレ・イヴィッチ先生（1924-1999）とともに、傑出した言語学者でスラヴィストのアレクサンダル・ペーリッチの高弟であり、世界的に有名な、旧ユーゴスラヴィアを代表する言語学者の一人であった。どのスラヴ語を研究するのであれ、イヴィッチご夫妻の名前を知らない者はいないだろう。

ペーリッチの弟子のうち、ベオグラードの学閥は師に忠実で、保守的であったのに対し、イヴィッチ夫妻が中心となった「ノヴィ・サド学派」は、1950年代に創設された大学の、新しく自由な雰囲気になり、ペーリッチの教えを発展させ、さらに欧米の様々な研究成果を取り組みながら独自の道を進み、セルビアの言語学を世界水準に導き、そして今日活躍する多くの言語学者、スラヴ語学者を輩出した。パヴレ・イヴィッチ先生が主に音韻論、方言学、そしてセルビア文語史研究を中心に組み込まれたのに対し、ミルカ・イヴィッチ先生はセルビア語統語論、意味論、一般言語理論、スラヴ諸語比較対照研究を中心に功績をあげられた。また旧ユーゴスラヴィアの言語学者の宿命であろう、ご主人ともどもセルビア・クロアチア語の標準語とその「バリエーション」の諸問題にも取り組まれることもあった。

ミルカ・イヴィッチ先生は、1962年の国際言語学会で発表された「スラヴ諸語における省略不可定語」という題目の報告で、スラヴ諸語を題材とした統語論研究の専門家として当時の西側世界で知られるようになった。1963年に刊行された言語学史『言語学の流れ』（日本語版は1974年にみすず書房から刊行）の英訳（1965年）をきっかけに世界的に著名となり、1968年に東京言語研究所の招きで来日するときには、遠く離れた日本でも知られる存在になっていた。余談ではあるが、英語学者である私の伯父も、イヴィッチ夫妻の来日と講義の印象を話してくれたことがあったので、私は言語学を勉強し始めた早い段階でその名前を知っていた。なお、『言語学の流れ』は、世界で10ヶ国語以上に訳されており、セルビアではその後の言語研究の発展（例えば認知言語学）も踏まえた第9版（2001年）まで改定が重ねられている。

イヴィッチ先生の業績は、セルビア科学芸術アカデミーが刊行した『学士院会員ミルカ・イヴィッチの業績』（2005、ベオグラード）や、『ミルカ・イヴィッチの言語学』（2008、ベオグラード）に詳しく書かれているので、ここでは繰り返さないが、その数は9冊の単著の他、学術論文を中心に400点以上に及んでいる。中でも1954年に刊行された博士論文『セルビア・クロアチア語の具格の意味とその発達』は、スラヴ諸語の通時的統語論研究の重要な著作であり、2004年には再版されるなど、今日でもその価値を保っている。

イヴィッチ先生の研究は主に構造主義に結び付けられるものであるが、その枠にとどまらず、一般言語学の発展とともに、さまざまな言語分析理論を、セルビア語を中心としたスラヴ諸語に適用し、その新たな分析の可能性と成果を提示する学者であった。

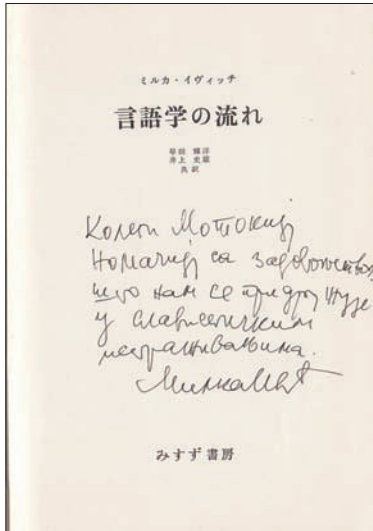


ミルカ・イヴィッチ教授
（セルビア科学芸術アカデミー提供）

イヴィッチ先生の論文の特徴は、広範な先行研究への目配り、明快な研究テーマ、分析方法の明晰さ、さまざまな言語との有効な比較である。著作は時に僅か数ページのこともあるが、その量と関わりなく、常に発見と示唆に満ちており、小さいながらも光り輝くダイヤモンドに例えられると思う。

最後の一粒のダイヤモンドは、我々にも残された。昨年、SESシリーズ第23巻として刊行された『スラヴ諸語における文法化：言語圏および類型論的アプローチ』に寄稿されたテキストは、文字通りイヴィッチ先生の最後の著作の一つになった。上述のピペル先生が、病床のイヴィッチ先生に論集が刊行されたことをお知らせしたとき、イヴィッチ先生は大変喜ばれたという。

* * *



初めてお目にかかった時に書いてくださったメッセージ「野町素己さんへ スラヴ語研究で私たちが親しくなれたことを喜んで」

イヴィッチ先生は、私の恩師であるピペル先生の恩師であり、私は直接薫陶を受けたわけではない。彼女に弟子入りを志願していたのであるが、私が留学を考えていた当時既に80歳のご高齢で、それは叶わなかった。しかしイヴィッチ先生の著作や先生との交流が私をユーゴスラヴィアにいざない、ピペル先生のもとでスラヴ語研究を行うきっかけを作った。だから、私の人生の決定的な方向づけをした人生の恩人である。

世界的な言語学者でありながら、決して尊大にならず、奢らず、誰に対しても耳を傾け、親切に接する先生のお人柄は、私に大きな印象を残した。

私がベオグラードに留学して間もない2003年の春、ベラルーシで私の論文が掲載された論集が刊行されたので、イヴィッチ先生にお渡ししようと学士院の受付に預けたことがある。イヴィッチ先生には世界中からいつも数多くの献本があるので、いかにも重要度が低そうな東欧の論集などが目に留まるわけもないと思い、誰かがいつかお渡ししてくれるだろうと思うだけで満足していた。

ところが、数日後、おそらくピペル先生に私の寮の電話番号を聞いたのであろう、イヴィッチ先生からお電話をいただいた。私の論文を読んで面白かったということ、私がベオグラードの生活に慣れたかどうか、研究は頑張っているか、そして近いうちに会ってお茶を飲んで話しましょうと言われた。緊張からか感動からか、恐らくその両方が原因で受話器を持つ手が震えた。

セルビアで開かれた言語学の学会でもたびたび先生にお目にかかることがあったが、先生の周りにはいつも多くの研究者が入れ替わり立ち替わり現れ、なかなか近づくことはできそうにない。しかし、それでも先生のほうから私を見つけて、取り組んでいる研究のテーマや近況などを聞いてくださった。その時の会話はいつも教訓的であり、私にとって形のない宝物である。遠くにおられても不思議と私を見つめ、手を振ってくださることが印象的であった。最初は、私の周りの人に手を振ってらっしゃるのかと思い前後左右を見たが、誰も反応していないので、私が控え目に手を振り返してみると、笑顔で頷かれた。先生は言語研究同様に視野が広く、大変気配りができる方なのだと思ってしまう。その後何回も先生と言語学の具体的なテーマについて話し、研究に関するアドバイスもいただいたが、それと同じくらい、

先生のこのような気さくな振る舞いは、私の留学時代の励みになった。

イヴィッチ先生はパソコンを一切使わない方だった。論文は手書きで、原稿はピペル先生に渡し、ピペル先生はパソコンに打ち込む係だったと聞く。だから留学から帰国した後は、まれに手紙を書くこともあったが、たいていは連絡がピペル先生経由になった。最後にイヴィッチ先生から直接連絡をいただいたのは、手元の葉書によると2007年9月である。ロシアのスラヴ語学者サムイル・ベルンシュテインの日記『記憶のジグザグ』（2002、モスクワ）という本を偶然みつけ、それにイヴィッチ夫妻やペーリッチのことが書かれていたことをピペル先生に申し上げると、該当部分をコピーして送るように頼まれた。その葉書はコピーに対する返礼である。

ピペル先生によると、私が帰国した後、私に職のあてがないことをひどく心配されていたと言う。だから2007年に私がピペル先生に日本学術振興会の特別研究員に採用されたことを報告すると、ピペル先生はすぐにイヴィッチ先生にお電話したとのことである。そして2008年に私がセンターに着任したときは、我がことのように大変お喜びだったという。また、ピペル先生を通じてご報告した私の研究プロジェクトにも興味を持たれ、機会があればいつでも協力すると言ってくださったと聞いた。それが上述の最後の一粒のダイヤモンドとなった。

直接の恩師ではなかったが、人生の恩人であり、遠くにいながらも私の近き理解者であったミルカ・イヴィッチ先生。私が親しくするセルビアの言語学者で、イヴィッチ先生のお弟子さんであるソフィヤ・ミロラドヴィッチ先生は「イヴィッチ先生は生前あなたのことをよく言っていました。あなたは葬儀には来られないけれども、私が代わりにお供えすればきっと先生がお喜びになるはずだから」と言って、埋葬の際に私の名前を書いた花束と蠟燭をお供えしてくださった。

他界された日は、遅々として進んでいなかった私の博士論文提出の日であった。無論偶然ではあるが、私には脱稿を見届けてから旅立たれたように思えてならない。イヴィッチ先生は「あなたが本を書いたら書評してあげます。早く書いてくださいね」と言っておられたが、これに間に合わなかったのが心残りである。直接知り合えた時間は短かったが、先生の一言が私を励まし、私に与えた影響は計り知れない。その全てに対する深い感謝の念を込め、心より先生のご冥福をお祈り申し上げる。

学 界 短 信

◆ 比較経済体制学会第51回全国大会開かれる ◆

比較経済体制学会の今年度の全国大会が6月4～5日に神戸大学で開催された。当初の予定では、26年ぶりに東北大学で開催されることになっていたが、3月の地震により急遽神戸大学での開催に変えられた。今年の大会では、「Varieties of Emerging Economies: 非先進経済のタイポロジー」が共通論題とされ、ロシアをはじめとする資源依存型新興国、東中欧、中国、ベトナム、サウジアラビア、ブラジル、ケニアに関して、学会外の専門家を含む7人の研究者からの報告があった。昨年の共通論題「世界経済におけるエマージング・エコノミー」に類似する問題設定であるが、今年は、類型化に主眼を置いた議論がなされたように思われた。総会では幹事の改選がおこなわれ、新しい代表幹事に久保庭真彰氏（一橋大学）が選出された。今年度の秋期大会は10月8日に一橋大学で開かれ、来年度の夏の全国大会は帝京大学で開催される予定。[田畑]

◆ 学会カレンダー ◆

2011年8月27-28日 第3回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於北京
10月8日 比較経済体制学会秋季大会 於一橋大学
10月8-9日 日本ロシア文学会第61回全国大会 於慶応義塾大学日吉キャンパス
10月8-9日 2011年度東欧史研究会・個別研究報告会 於学習院女子大学
10月22-23日 ロシア史研究会2011年度大会 於青山学院女子短期大学
10月22-23日 2011年度ロシア・東欧学会研究大会(JSSEESと合同) 於東京国際大学
11月11-14日 スラヴ言語学国際会議「スラヴ諸語における文法化と語彙化」 於北海道大学
11月17-20日 ASEES(スラブ・東欧・ユーラシア学会)年次大会 於ワシントンDC
11月25-27日 スラブ研究センター冬期シンポジウム(GCOE) 於北海道大学
2012年1月19-20日 スラブ研究センター冬期シンポジウム(新学術領域) 於スラブ研究センター
センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 附属図書館改修工事の進行と資料再配置 ◆

北海道大学附属図書館本館の「再生事業」については、昨年夏の122号ですでお知らせしましたが、2009年度から4ヵ年という当初計画は、補正予算等の関係から若干前倒して進行中です。予定では2011年度末に竣工、その後に設備関係工事、資料の移動と再配置等の作業があり、全面開館は2012年秋と見込まれます。

その間、一時的に利用できなくなる資料が多数あり、個人コレクションや学位論文など、資料によってはその期間が1～2年にわたるため、利用者のみなさまにはご不便をかけておりますが、よろしく願いいたします。

また、今回の改修を機に、これまで「本館・スラブコレクション」として配置されてきた資料の収蔵場所が変更される予定です。

「本館・スラブコレクション」のうち、製本雑誌は欧文・露文とも、この7月に開館した「南館」の自動化書庫に、本館の他の製本雑誌類と一緒に収蔵されます。また、来年の「再生事業」完了後、欧文図書は、本館の他の洋図書とともに本館4階に混排で収蔵されることになりました。なお、露文図書については、引き続き本館1階に別排架される予定です。[兔内]

◆ モスクビチャニン誌(マイクロフィルム)の購入 ◆

『モスクビチャニン』は、19世紀の中葉、1841年から1856年まで、モスクワでミハイル・ポゴージン(1800-1875)が出版していた雑誌です。ポゴージンは、モスクワ大学で歴史学を講じていましたが、1841年に教授職を辞し、史料の編纂と出版の仕事は続けながら、主な活動の舞台を言論界に移しました。

『モスクビチャニン』には、発行者ポゴージン自身の他、イワン・ベリヤーエフ(1810-1873)、コンスタンチン・アクサーコフ(1817-1860)、アフアナシー・フェート(1820-1892)、アレクセイ・ホミャコフ(1804-1860)、イワン・キレーフスキー(1806-1856)、ピョートル・ヴァゼムスキー(1792-1878)ら、主としてスラブ派的傾向の多くの作家や思想家たちが寄稿しましたが、1840年代末には購読者が落ち込み、危機的な状況に陥りました。そこで、アレクサンドル・オストロフスキー(1823-1886)など、若手の編集者を招いて立て直しを図りましたが、その後彼ら

とポゴージンは対立するようになり、雑誌は1857年に廃刊となりました。

本センターでは、昨年度、この雑誌のマイクロフィルムの1841-1852年分を、ナウカ・ジャパン社より購入しました。また、残りの分についても、遠くない時期に整備したいと考えています。[兎内]

編集室だより

◆ 『境界を超えるトルストイ』の刊行 ◆

GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」・日本ロシア文学会共同出版の論集『Лев Толстой: сквозь рубежи и межи [境界を超えるトルストイ]』が、2011年5月に刊行されました。日本ロシア文学会が、同GCOEプログラムと国際交流基金「知的交流会議助成プログラム」による協力・助成の下、作家レフ・トルストイ没後100年を記念して、2010年11月6日に熊本学園大学で開催した同名の国際シンポジウムの内容に基づいています。

ロシア在住20年のトルストイ研究家・佐藤雄亮氏の「トルストイのヒロインたち：超えられない境界」、旧ソ連出身の米国の研究者イネサ・メジボフスカヤ氏「ユダヤ人居住区を超えた対話：トルストイとユダヤ人問題」、独自の視点からトルストイを論じて韓国で人気のソク・ヨンジュン氏「トルストイと神経科学」、ロシア文学研究所で20世紀初頭のジャーナリズムを研究しているアレクサンドル・アレクサンドロフ氏の「トルストイの家出と死：1910年11月の紙上論争」の4論文と、若手トルストイ研究者ナジェジダ・ババーエヴァ、気鋭のロシア文学者・乗松亨平両氏のコメントの他、シンポジウム当日の全体討論の様子が収録されています。

本文はセンターのサイトからダウンロードできます。[中村唯史]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/kaken/nakamura2011/contents.html> (本文ロシア語と英語)



◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第59号(2012年春刊行予定)の原稿締切は、8月末です。ホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください(事前申し込みは不要です)。規定の分量を大幅に超える投稿も散見されますので、十分に論点を整理して、推敲を重ねた上でご提出いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。[長縄]

会議 (2011年5月～7月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2011年度第1回 6月11日

議題

1. 共同利用・共同研究拠点活動について

1) 22年度活動報告 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究

- 2) 23 年度活動状況 プロジェクト型公募共同研究・共同利用型個人研究
2. その他

◆ センター協議員会 ◆

2011 年度第 1 回 7 月 21 日

議題

1. 2010 年度支出予算決算について
2. 2011 年支出予算配当（案）について
3. 特任助教の辞職について
4. 特任教員（旧外国人研究員）候補者の選考について
5. 客員研究員について
6. 大学間交流協定について
7. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 125 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[望月／大須賀]

- 5 月 9 日 西山克典（静岡県立大）
- 5 月 12 日 吉村貴之（東京外国語大）
- 5 月 16 日 半谷史郎（愛知県立大）
- 5 月 20 日 高尾千津子（立教大）
- 5 月 27 日 堀江典生（富山大）
- 5 月 28 日 倉田有佳（函館市役所）
- 5 月 30 日 神長英輔（新潟国際情報大）、林忠行（京都女子大）
- 6 月 2 日 Iikka Korhonen（フィンランド銀行）
- 6 月 9 日 鈴木治郎（トヨタ）
- 6 月 11 日 上垣彰（西南学院大）、上野俊彦（上智大）、佐々木史郎（国立民族学博物館）、月村太郎（同志社大）、西山克典（静岡県立大）、沼野充義（東京大）
- 6 月 16 日 土田環（映画専門大学院大）
- 6 月 20 日 Brian Joseph（オハイオ州立大、米国）
- 6 月 21 日 Wayles Browne（コーネル大、米国）
- 6 月 25 日 Atner Khuzangay（チュヴァシ国立人文科学研究所）
- 7月7-10 日 Tsypylma Darieva（筑波大）、Pierre Grosser（パリ政治学院、フランス）、James Hershberg（ジョージ・ワシントン大、米国）、Kim, Seung Young（アバディーン大、英国）、Lorenz Luthi（マギル大、カナダ）、Vojtech Mastny（パラレル・ヒストリー・プロジェクト、米国）、Sergey Radchenko（ノッティンガム大、中国）、Igor Saveliev（名古屋大）、Soeren Urbansky（フライブルク大、ドイツ）、項尹（早稲田大）、秋田茂（大阪大）、秋葉淳（千葉大）、麻田雅文（恵泉女学園大）、池田嘉郎（東京理科大）、石井明（東京大名誉教授）、泉川泰博（中央大）、伊藤融（防衛大学校）、井上貴子（大東文化大）、井上正也（香川大）、岩田賢司（広島大）、上垣彰（西南学院大）、大串敦（大阪経済法科大）、岡崎麻優子（(株) ミネルヴァ書房）、小野圭司（防衛省防衛研究所）小野瑞絵（学習院大）、片原栄一（防衛省防衛研究所）、我部政明（琉球大）、亀山康子（国立環境研究所）、管英輝（西南女学院大）、木村崇（京大名誉教授）、楠綾子（関西学院大）、倉田秀也（防衛大学校）、金野雄五（みずほ総合研究所（株））、佐々木紳（東京大）、佐々木卓也（立教大）、澤江史子（東北大）、下斗米伸夫（法政大）、杉本良男（国立民族博物館）、高尾 千津子（立教大）、鶴見太郎（日本学術振興会特別研究員）、唐

亮（早稲田大）、富田武（成蹊大）、中居良文（学習院大）、長勢了治、中村靖（横浜国立大）、袴田茂樹（青山学院大）、林忠行（京都女子大）、古矢旬（東京大）、細井長（國學院大）、堀井伸浩（九州大）、松本はる香（アジア経済研究所）、丸川知雄（東京大）、皆川修吾（北大名誉教授）、毛里和子（早稲田大名誉教授）、本村真澄（（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、山口昭彦（聖心女子大）、山添博史（防衛省防衛研究所）、山根聡（大阪大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉田修（広島大）、吉田真吾（日本学術振興会特別研究員）、吉村貴之（東京外国語大）

7月12日 西内修一（北海道立総合研究機構水産研究本部栽培水産試験場）

7月15日 家永真幸（東京大・院）

7月16日 若島正（京都大）

7月23-24日 青島陽子（愛知大）、住家正芳（明治大）、中村真、宮本万理（人間文化研究機構）

7月25-27日 赤尾光春（大阪大）、荒井幸康、井上まどか（清泉女子大）、藤原潤子（総合地球環境学研究所）

7月28日 Alfred Majewicz（アダム・ミツキェヴィチ大、ポーランド）

7月30日 山崎典子（東京大・院）

◆ 研究員消息 ◆

野町素己研究員は4月1～10日の間、新学術領域研究第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関する学会での研究発表及び共同研究に関する研究打合せのため、英国、セルビア共和国に出張。また、5月20～30日の間、科学研究費研究に関する現地調査及び出版打合せのため、ポーランドに出張。

長縄宣博研究員は4月5～11日の間、ワークショップ開催・参加及び研究打合せのため、米国に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は4月7～21日の間、科学研究費研究に関する会議出席及び資料収集のため、米国に出張。また、4月25日～5月16日の間、科学研究費研究に関する学会に参加及び資料収集のため、フランスに出張。また、5月28日～6月9日の間、科学研究費研究に関する資料収集及び研究打合せのため、米国に出張。

松里公孝研究員は4月12～18日の間、科学研究費研究に関するASN学会での研究発表のため、米国に出張。また、5月25～30の間、新学術領域研究第2班「エリート、ガバナンス、政治的亀裂、価値」に関するワークショップ及び研究打合せのため、スウェーデンに出張。また、6月11～23日の間、科学研究費研究及び新学術領域研究総括班「『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括」に関する露中印土の政治比較の為の現地研究者との打合せ及び2010年大統領選以後の政治状況調査のため、インド、トルコ、ウクライナに出張。

岩下明裕研究員は5月12～25日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する（クイーンズ大学の）国際会議出席及び研究打合せのため、英国及びオランダに出張。また、6月24～26日の間、韓国啓明大学国境学会出席のため、韓国に出張。また、7月12～15日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関するワークショップ参加及び意見交換のため、中国に出張。

田畑伸一郎研究員は6月13～19日の間、第4回北東アジア地域協力・発展国際フォーラムにおける資料収集及び中口国境地域視察のため、中国に出張。

2011年7月9日(夏期シンポジウム後の土曜日)、外国人を中心とする希望者が洞爺湖、有珠山方面に出かけました。

以下はアテンドを務めたシンポジウム実行委員による写真とキャプションです



洞爺湖にて。初めての温泉を体験した海外ゲストの方々には、日本の文化は未知の世界ですね…という声も



参加者の方々には有珠山の自然と歴史を体感していただきました



プログラム終了後、自然とのふれあいの中、和やかな雰囲気でも語り合っていました

| | | | |
|------|------|--|-------|
| エッセイ | 左近幸村 | コバチンスカヤに ^{フレイジー} 首っだけ! | p. 13 |
| | 野町素己 | セルビア科学芸術アカデミー会員ミルカ・イヴィッチ (1923-2011)のご逝去を悼む | p. 16 |

2011年8月15日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 家田修
発行者 望月哲男
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>
